（第3種郵便物認可）　毎日新聞　ふくしま　福島

1993(H.5)3.23.

昭和村の喰丸文化再学習センター　事務局を設置

夢追って藤森さん就任

大沼郡昭和村に昨年、廃校を利用して発足した「喰丸文化再学習センター」＝文化人類学者で東京外語大教授の山口昌夫さんが設置＝に、専任の事務局員として長野県出身の藤森弘さん（三〇）が就任する。藤森さんは、同センターに住み込んで、村の文化面でのアドバイスもしていく。

同センターは、廃校となって取り壊すはずだった旧喰丸小を、村から山口さんが借り受けて「国際的な文化発信の拠点に」との目的で発足させた。昨年は、作家の井上ひさしさんを招いて討論会を開いたり、宗教人類学者の中沢新一さんらを招いた講座を開設する運動をしてきた。

だが、村と山口さんとの連絡が取りにくいことや、文化発信の拠点としての活動充実のため、専任の事務局を置くことにした。

藤森さんは、信濃毎日新聞社で記者をしており、書評欄の担当者として山口さんと親交があった。そこで山口さんの活動に協力することになり、今年二月で退社、今月末から同村に住み込むことにした。

村は藤森さん在教育委員会の嘱託職員として採用し、生活の一部を保証、村の文化活動について協力してもらう。藤森さんは「物書きになりたいという夢がある。昭和村には、優れた伝統芸などの文化があり、ここに来ることで、自分の夢に近付いた感じがする。地方から世界への文化の発信地として充実していきたい」と話している。

今年の同センターのイベントとしては、五月に海外演奏家の演奏会や八月に書道文化の催しが計画されている。

村のシンポで昭和村の魅力を語る藤森さん（21日）

福島民報　1993(H5).3.25.三面

県内　（第三種郵便物認可）

「自然の宝庫」昭和に移住

長野の藤森　弘さん

記者経験生かし「魅力を発信」

長野県の新聞記者が本県奥会津の魅力に取りつかれ、会社を辞め四月から昭和村に移り住む。「日本の原風景が昭和村にはある」というこの人は長野県岡谷市生まれの藤森弘さん（三〇）。過疎と高齢化に悩む村にとって、藤森さんの来村は大歓迎。「昭和に永住したい」と藤森さんの決意は固い。

藤森さんは慶応大法学部卒。地元の銀行に就職したが、一年余りで退社。地方紙信濃毎日新聞社に記者として入社、支社勤務などのあと本社文化部で家庭面を担当していた。

この時、昨年八月に昭和村の廃校を利用して「喰丸文化再学習センター」を設立した文化人類学者で東京外語大教授の山口昌男さんが、同社の書評委員をしていた。

センター設立前の昨年六月、取材で昭和村を訪れ、「四周の山は額縁のようで、子供のころに見た日本の原風景を思い出した。第一印象で気に入った」という。

一月に信濃毎日新聞社を退社した。四月から昭和村に住み、村教委の嘱託職員としてセンターの活動記録のまとめなどをする。今月二十一日には村で開かれた「生き生きフォーラム」にパネリストとして持論を述べた。「山村は高度成長期に取り残されたが、それだけに都市が失ったものを持ち続けている。それが昭和村だと思う。豊かな自然がこれから日本の、いや世界の脚光を浴びるのでは。ミニコミ誌などの発行もやってみたい。昭和村に人生をかけてみたい」と意気込む。

鈴木新一郎村教育長は「山口教授に続き、今度は藤森さんと昭和村の魅力を日本中に発信する味方が来てくれることは、大変うれしい」と大喜びだ。

鈴木教育長と握手する藤森弘さん（右）